

アリストテレースに於ける知性の構造 (承前)

安 藤 孝 行

七

我々は先に靈魂機能の關聯を語るに際して、認識能力の發生と發展の過程を詳論した。之を要するに一般に靈魂機能の發展は生活様式に制約され、諸機能の質的差別の根柢には量的な連続性が支配する。機能の進化とは生物の生活様式の複雑化、或は結局は同じことであるが、その生活環境の時間的空間的擴大に正比例する。隨て認識機能それ自體が營養や生殖と言ふ如き下意識的な生機能の連続的發展であり、認識機能相互の間にも同一の連続性と累層性の法則が妥當する。斯くして先づ觸覺や味覺の如く生命維持の上に必須的な感覺が發生し、その上に更に嗅覺、聽覺、視覺の如き高等感覺が發生する。感覺に於ける抽象と綜合の機能は或る程度外界から獨立せる表象を生み出し、之がそれ自ら表象の一種である時間の意識によつて記憶想起期待の如き高次の直觀機能となり、之が組織されたものが經驗に他ならない。經驗の要素は記憶表象であるが、之が更に抽象され記號化されて概念となり、一層廣汎にして緊密な體系をなせば我々は技術を持つことになる。技術は既に法則による概念組織であるが、その技術の中にも高等な統制的なものと同様な技能とが區別され、前者は科學に向ひ、後者は經驗に接續する。技術は或る意味で既に科學性を含むが、科學は次第にその獨立性を獲得する。この獨立性が完成すれば茲に實踐や實用を超えて純粹な認識の爲の科學が發生する。之が理論知である。(一五)理論知と雖も特殊的認識を含むことは我々が先に論じた如くであるが、之を特色づけるものは普遍的認識であり、殊に最も普遍的にして究極的なる原理や原因の認識である。その意味に於て最高の理

論知は原理の學としての叡知^{ソフピア}であり、具體的に言へば形而上學とか神學の如きものがそれである。斯くの如く認識の發生過程に於ては理論的認識は最終のものであるが、價值的見地からすれば之が最高の認識である。^(一〇)實踐的實用的認識は理論的認識の發生すべき基礎をなすものとして必須的であるがその自體價値に於ては前者は後者の下位に位する。

之等實踐と理論の兩領域に互る理知の徳性としては技術^{テクネ}、知識^{エピステモ}、思慮^{フロンテシス}、叡智^{ソフピア}、理性^{ライシス}の五つがあげられる。但し之を直ちに徳性と呼ぶことに就てはまた一つの難問がある。アリストテレス自身がニコマコス倫理學第六卷第三章^(一一)に於て之を列挙してゐる言葉をそのままに引用すれば次の如くである。「靈魂をして肯定と否定とによつて眞理を認識せしめるものとして五つのものが挙げられよう。即ち技術、知識、思慮、叡智、理性がそれである。假説や臆見が省かれるのは、之等は偽を認識することの原因となりうるものだからである。」^(一二)プラントウルは之等五つの概念の中唯思慮と叡知のみを徳性とみなし、その他は單なる能力であると言ふ。即ち科學と理性とは前者は推論であり、後者は原理の直観として理論知の契機をなし、その徳性が叡智である。他方技術はアリストテレスが技術の徳はあつても思慮の徳はないと言つたり、又他の箇所^(一三)に於て同じく眞理を認識せしめるものとして列挙せる中で特に技術のみが省かれてゐる事等によつて徳性たることを拒み、技術の徳とは叡知に他ならないとする。隨て實踐知の徳性とは思慮のみであり、その中には優れた思量^{エウフロリア}とか明察情理^{シユネシス}、伶俐^{プロノイア}の如きが含まれると言ふのである。ツエラーは之に反對して問題の第六卷の主題は第一章に於ては理知的徳の論議にあるとされて居り、また徳はすぐれた把持性であるとされるが、プラントウルの除外した科學とか理性とか技術と言ふものは何れも把持性であると言はれて居ることを指摘する。我々はツエラーの論據そのものを以て充分であるとは考へないが、併しプラントウルの説の誤なることは疑を容れない。第一右の引用文の現れる直ぐ前の原文を省るに、前章の終りは「かくして理知的な兩部分の機能は何れも眞理認識に他ならない。それ故兩者のそれぞれをして最もよく眞を認識せしめる諸把持性が兩部分の徳なのである」と

なつて居り、之を承けて第三章は「我々はそこで初めに溯り之等に就て更めて論じよう」と言ふのであるから、この文脈からしても列擧されたものが五つの理知的徳であると解するのは極めて自然である。また「判断や臆見が省かれるのは之等が偽を認識することの原因となりうるものだからである」と言ふ但し書は判断や臆見が單なる機能にすぎないのに、他の五つの把持性は既に徳性としての價值を含んでゐると言ふことを意味するものに他ならない。何故ならば判断にしても意見にしても言ふ迄もなく偽たりうると共に又眞たりうるものであるから、若しも前掲の五把持性の中の三者が價值的に無記な能力とか機能にすぎないならば、特にこの二つを除外すべき但し書は無意味とならざるをえない。技術についての言にしても我々はその概念を單なる能力としても、徳性としても用ひると解すれば困難を脱しうるものであり、實際アリストテレスは之等の概念を單なる能力としてではなく徳性として語つてゐる方がはるかに多いのである。技術の徳性を徹知に求めんとする説に至つては窮餘の解決として措の至れるものである。^(二二〇)かくては理論的實踐的作爲的と言ふ理知の分類そのものは根本的に否定される他はない。若し之を何れか他の概念に歸せんとするならば寧ろ思慮に歸した方が遙かに適當であらう。併し嚴密に言へば技術はやはり一種獨立の徳なのである。

要するに我々は前掲の五概念を以て理知の徳の代表的なるものと認める。特に代表的なものと言ふ所以は、その他にも從屬的な徳性は數多く認めうるからである。之等の中理性と知識と徹知とは理論知の徳であり、思慮は行爲的な意味での實踐知の徳、技術は廣い意味では實踐知の、一層嚴密には作爲知の徳性である。我々の關心は差當り認識機能にあつて特に徳性には限らない。隨て右の論争も左程重要性を持つものではない。併し機能の研究が徳性に基いてなされることは勿論方法的に不都合を含むとも考へられない。但し之等の諸徳性の全般に互つて詳論することは實踐の構造を解く上に必ずしも必要ではなく、理論知に就ては唯實踐知の構造を理解するに足りる程度に於て概観すれば充分であらう。

我々は先に理論知としての知識的理知に理性と知識と叡知の三種が分たれると言ふことを學んだ。理性は原理の直觀的把握であり、知識は普遍と特殊の媒介としての推論を營み、叡知はこの兩者の綜合として、理論知の完全な現實態であると言はれた。認識の中樞をなすのは言ふ迄もなく知識であり、知識の形式が推論である。併し推論に於ける最高の大前提はもはや推論的に論證することが出来ない。(110)それは直接的に把握される他はない。この普遍的原理の直觀的能力が理性である。(111)それは直觀的である限りに於て感覺に類するが、普遍的である限りに於てその反對である。叡知は理性と知識の綜合である。(112)完全な理論的認識は叡知の體系である。科學は論證の體系であり、論證は知的直觀としての理性を前提するから、科學的認識は中間的である。完全な理論知の體系とは叡知の實現であり、之が哲學に他ならぬ。(113)

知識は普遍と特殊の媒介であるが、この媒介には二つの形式がある。一は普遍から特殊に降る演繹的推理であり、之が所謂論證であるが、(114)他は逆に特殊から普遍に昇る歸納推理である。(115)論證の大前提をなす普遍的原理は一應理性によつて直觀的に捉へられると考へるが、それは形式的な思考の原理の如きものであつて、凡ての認識原理が先天的に認識されるものではなく經驗によつて歸納されねばならない。(116)彼は形而上學や自然學を數學等と同様理論學に數へてゐるにも拘らず、その原理の認識に於て根本的に異なることを指摘してゐる。數學の對象は純粹に抽象的な概念である爲、その原理の認識も先天的に可能であるのに、形而上學や自然學にあつては、その原理が經驗を必要とするから、年少者は數學に通達することは出来ても、自然學者や哲學者にはなれないと言ふのである。(117)

この様に演繹的推論の前提が歸納的に認識されるとすれば、知識は理性を要するのみならず、個別に就ての直觀を必要とする筈である。個別に關する認識として、我々は先に臆見と感覺を認めた。しかるに臆見はなる程個別に關する一種の認識ではあるが、直接與へられた對象の直觀ではなく、未來又は過去の現象或は空間的に隔つた地に於ける現象の想像であり、且それは背後に無意識的潜勢的な推論を豫想した。それ故歸納の出發點としては臆見ではなくして、

感覺が認められねばならない。^(一三九)感覺は本來は實踐的認識に近く、快苦の感情を伴つて欲求の原理となるのであるが、時として却て理論的認識の要素として認められる。蓋しこの様に直接直観知に於ては、理論と實踐の對立は未分化であるから、それは實踐知の要素とも理論知の要素ともなりうるのであらう。併し感覺は特に理論認識の一種として述べられてゐない。それは知識の目的が個別に適用されることにあるのではなくして普遍的原理間の認識にあることからして當然である。感覺は理論的認識の極小限である。我々は茲から出發せねばならぬが、それは目的ではなくして、むしろその反對の方向に超えらるべき端緒に過ぎない。^(一四〇)我々は個別に即して普遍を讀みとらねばならない。理論領域に於て個別の認識が輕視されるのは、それが認識の目的から最も遠い極限である爲にすぎない。

一方我々の當面の課題である實踐知についてみれば、實踐知は前述の如く行爲知と作爲知とに分けられ、之等のそれぞれ徳性は技術と思慮とに代表される。しかし技術と云ふ概念は先にも述べた如く時には知識と殆ど同義に用ひられて、單なる個別に關る經驗^{エムピリヤ}より價值的に優れた認識とされる。之は知識を普遍知と言ふ意味に解するプラトーン的思想を豫想するものであつて、技術概念のこの種の用法は特に初期的な部分に多く認められる。知識を理論知と限定する時には技術は之に對立して別種の對象に關る認識能力となる。即ち理論知が他様たりえぬ必然存在を本來の對象とするのに對して、技術は寧ろ他様たりうる事柄に關る。^(一四一)知識は自己目的であるが、技術は作爲の原理をなし、他様たりうる存在の上に自己の意欲による形相を附與する限定原理である。技術の目的は作爲であるから、その限りに於てこの認識の目的も他者を目指し、而も個別に關るのである。併し個別を目的とする認識は必ずしも個別的認識ではない。この事は特に強調せねばならぬ。個別は認識の目的であつて、その對象や内容ではない。個別をよく處理する爲には普遍的認識を持たねばならぬ。普遍的認識を知識と呼ぶならば、その限りに於て技術は知識を契機とする。併しそれは勿論理論知と言ふ意味で知識的ではない。技術知は理論知と同様普遍的な内容を含むが、唯それが認識の目的ではなくして手段である點が本質的な相違である。逆に言へば理論知も亦個別知を契機とするが、認識の目的は

あくまで普遍的な認識そのものにあるのである。技術に於ける普遍的認識は理論知ではなくして所謂統制アルキメテック的と呼ばれる技術である。^(一三三)それは普遍的であり乍ら、而も個別に處する道を教へることを目的とするところの認識である。

技術に就ては先にも觸れた如く、之を單なる能力とみるか、同時にまた徳であるともみるかと言ふ問題がある。それは「技術の徳といふものはあつても思慮の徳はない」と言ふ言葉や、思慮が「理を伴へる眞なる把持性」^(一三五)と定義される一方技術が「眞なる理を伴へる把持性」^(一三六)と規定されると言ふことによつて、之を單なる能力と解する説があるからである。かゝる論者は技術は善き目的に奉仕する限りに於てはじめて徳となると考へるのであつて、事實大道徳學の説明は之を裏書する如くである。^(一三八)併し徳と言ふ概念は決して單に倫理的道德的な價值に限るものではなく、凡ゆる能力の卓越を意味するのであり、^(一三九)技術の如きは一種の認識能力であるから、その徳性も亦善き目的に存するのではなくして、その認識の正しさに存する。隨て假令同一の概念が單なる能力の意味で用ひられるにもせよ、それはやはり理知的な徳たるを失はない。そして實際之に對する不徳として無技術と言ふ概念が用ひられてゐるのである。^(一四〇)無技術が誤れる理を伴へる作爲可能な把持性と言はれ、技術が眞なる理を伴へる作爲可能な把持性と言はれる以上技術が一種の理知的徳であることは疑問の餘地がない。

次に技術と並んで實踐知の一種をなすのは思慮である。思慮 *gnothois* と言ふ概念がプラトーンに於ては單に實踐知と言ふ意味に限らず、^(一四一)理知一般を意味して、知識 *epistēmē* と無差別に用ひられたこと、アリストテレスに於ても初期にはこの様なプラトーン的使用法が認められ、^(一四二)之が特に實踐知又はその徳性として獨立し、他方知識を理論知に限る用法が現れたこと、そしてこの區別がエウデーモス倫理學とニコマコス倫理學の成立年代決定の鍵となつたと言ふイエーガーの説は今や既に哲學史的常識に屬することであつて、^(一四三)茲に繰説の要を認めない。唯併し一言注意すべき事はプラトーンに於ては思慮と知識の概念的區別こそなければ、實踐知と理論知の區別そのものがなかつた譯ではないと言ふことである。それは先に述べた如きポリテイコス篇の知識分類にも認められるし、また例へばメノーンの如き

初期の作品に於て既に知識が教へられるものであるのに對して徳は教へられないことを論じ、しかも徳といふものが人間に有益であり善きものである限り、之を指導するのは何等かの意味での知でなければならぬと考へ、茲に實踐領域に於ける指導的な認識をば眞なる臆見、或は善き臆見といふものに認めてゐるのである。(一四二)之は明かに實踐知の特殊性の自覺でありそこにはまた實踐知の蓋然性の認識をさへ讀みとることが出来ると思ふ。隨てアリストテレスが思慮と言ふ概念を特に實踐知として用ひた事は必ずしも彼の獨創ではなく、むしろ概念的區別の判明の程度的進歩とみるべきことであらう。(一四三)次にその普遍性と特殊性とに關しては、我々は右に技術がこの兩契機を含むことを觀察したがそれは思慮又は行爲に關する認識に就ても事情は同様である。茲に於ても認識の目的は行動にあり、行動は個別に關るから、實踐知の目的は個別的事態である。併しそれは決して單に個別的な事柄についての知識に止まらずして、普遍的な法則の認識を含む。即ち茲にも一種の統制的實踐知と言ふものが要求される。この實踐知の最も包括的な概念は思慮であり、廣義の思慮の中には倫理學や政治學の様な實踐哲學の普遍的統制的認識から、最も直接的個別的な行動知を含むことは先にタイヒミュラーの説によつて述べた通りである。

それ故實踐知はその目的が個別的な行爲である點に於て理論知から區別され、また技術が作爲の成果を目的とするのとも區別されるが、しかもその認識の構造は普遍から個別に至る媒介知をなすのである。理論知に於ては前述の如く個別は感覺され、普遍は理性によつて直觀せられ、兩者を媒介するのが知識であつたが、それでは實踐知の活動の契機とは何であらうか。この點に就てはアリストテレスの敘述も不充分であると共に、諸家の解釋にも定説といふものがなく、我々に對してその解決が課せられて居る。實踐知の代表的な徳として擧げられたのは前述の如く思慮と言ふ概念であつたが、實踐知そのものが多くの契機を含む以上、思慮も亦恰も廣義の知識の如き類的な意味を帯び直ちに單なる原理の認識とか推論知と限定することをえない。しかるに實踐知に屬すると考へられる機能又は徳性とはフレイシス(一四四)思、モウソリス(一四五)量又は優れた思慮、メテ(一四六)明察、メテ(一四七)恰、メテ(一四八)知の如きであるが、この中思量又はその徳としての優

れた思量を除いて他のものは何等か第二義的な把持性にすぎず、眞に思慮の本質的契機となすに足りない。しかも思量や優れた思量とは専ら媒介知であり推論知であると考へられる。^(一四九)それでは特に原理的な普遍的認識又は直接的な個別の直観は如何なるものであらうか。差當りその候補となるのは倫理的徳と所謂實踐理性と呼ばれる特殊機能の他ない。蓋し倫理的徳は思慮の成立する前提條件であり、實踐的推論の前提をなすものであると言はれ、^(一五〇)また實踐的思惟のはじめをなす目的を定立するものと説かれる。^(一五一)

(未完)

一一五 An. Post. B. 19, 100 a3; Met. A. 1. 980 a28, 981 b13; 拙稿「アリストテレースに於ける靈魂諸部分の聯關」註九
セ、一一八参照。

一一六 Met. A. 1. 981 b19. 「かくして前述の如く經驗者は感覺の持主よりも聰明であり、技術家は經驗者より、技師は職人より、理論的(知識)は技術的(知識)よりもすぐれたものであると考へられる。」cf. An. Post. A. 31. 83 a4.

一一七 Eth. Nich. Z. 3. 1139 b14.

一一八 Prantl, Ueber die diazoetischen Tugenden d. nikom. Ethik. cf. Rossow, Forschungen 124. Note. Stewart
Note on 1139 b14.

一一九 Zeller, Op. Cit. II. 2. 649. N. B. 2.

一二〇 確かに Eth. Nich. Z. 7. 1141 a9. に於ては技術の卓越をソピアと呼んでゐるが、それは通俗的用法の一例をあげたものであらず。

一二一 Eth. Nich. Z. 3. 1139 b29. 「かくして推論は普遍的なものから出發する。それ故原理は推論の出發點であり、原理の推論は存在したる。」cf. An. post. A. 19. 82 a7, 22. 84 a31. Eth. Nich. Z. 6.

一二二 An. Post. A. 23. 85 a1 「さうして推論に於ては單一なるものは無媒介的前提、論證や知識に於ては理性である。」
A. 19. 100 b8. 「そして理性以外の如何なる種類の(認識)も知識よりすぐれて明かではないが、論證の原理(前提)は一層よ

アリストテレースに於ける知性の構造(承前)

く知られるものであつて、凡て知識は理由ロギクを伴ふから原理(前提)には知識はありえないであらう、そして理性より他には知識以上に眞理をとらへる事の出来るものはないから、原理に關するものは理性であらう。」Eth. Nich. Z. 6. 1141 a7. 「原理を認識せしめるものは理性のほかはない。」Ibid. 12. 1143 b1. 「理性も兩様の方向に於て最終なものに關してゐる。即ち最初の諸定義や最終のそれと關するものは理性であつて證明デモンスではない。」

二三三 Eth. Nich. Z. 7. 1141 a3. 「従つて微知とは理性及び知識であり、いはゞ頭を持つた最も高貴な事情についての知識である。」Met. A. I. 981 b21.

二三四 但し *epistēmē* という概念が嚴密な意味での哲學を現す用語として用ひられてゐるとは限らないことはこの章のはじめに述べた通りである。

二三五 但し普通の原理から特殊に降る推論のすべつが論證ではなく、論證と並んで辯證 *dialectic* と言ふものである。その區別は論證は一つの必然的な前提から出發する眞なる認識であるが、辯證は矛盾對立をなす前提の二つをえらんで之を出發點 *apothesis* である。An. Pr. A. I. 24 a30, 22, 23, b13. cf. An. Post. B. 2. 73 a10, 6. 74 b10. An. Pr. B. 23. 68 b10. Met. A. 5. 1015 b7. Z. 15. 1039 b31. An. Post. A. 4. 78 a24. Eth. Nich. Z. 5. 1140 a 34.

二三六 An. Post. A. 13. 81 a40. 「論證は普通のものから出發し、歸納は部分的なものから出發する。」Ibid. A. 7. 92 a35. Phys. 6. 1. 253 a25. Met. A. 9. 992 b33. E. 1. 1025 b15. K. 7. 1064 a9. Top. A. 12. 105 a13. 「1) 歸納は部分から一般へ、2) 論證は一般から部分へである。推論とは何であるかと云ふことは前に述べたが、歸納とは個別的なものから普通のものへ行く道である。2) の推論は勿論論證の如きである。An. Pr. A. 25. 42 a3. An. Post. A. 1. 71 a5. B. 7. 92 a35. A. 31. 88 a2.

二三七 Eth. Nich. Z. 3. 1139 b28. 「1) 歸納は普通のものから出發する。」cf. Eth. Nich. A. 7. 1093 b3. Rhet. B. 20. 1393 a27.

二三八 Eth. Nich. Z. 8. 1142 a11 ff. 「1) 述の如きものは、その爲に若き人は幾何學者とか數學者とか、その様な學者になることはあつても思慮ある人とはならないと考へられることである。その原因は思慮は經驗によつて知られる様になるとい

るの個別にも關るのに、若い者は經驗に富んでゐない爲である。何故なら經驗をつくるためには多くの時間を要するからである。人はこの様なことを考へるかも知れぬ。即ち少年は數學者になりえても知者や自然學者には何故なりえぬかと。おそらくその譯は、前者は抽象によつてであるのに、後者はその原理が經驗から來るのでありまた若者は後者では信念なしに語るが、前者ではその對象は明證的であることであらう。ここでは知識と年齢の關係が三段に分けて考へられてゐる。第一に數學の如き純粹に抽象的な理論は全く經驗を要しないので、少年にも理解出来る。第二に自然學や形而上學の原理は經驗を要し歸納によつて到達されるが、それは實踐的倫理的品性を要せぬから、青年にも理解出来る。第三の倫理學とか政治學の如きは倫理的徳を要するが、之は永き經驗による習慣づけを必要とするので壯年にならねば眞に體驗的に了解されないのである。cf. Eth. Nich. A. 7. 1098 b3.

一二九 Eth. Nich. A. 7. 1098 b1 ff. 「併し凡ゆる事柄について同じ原因を求むべきではなく、或る事柄にはであるといふことがよく示されてゐるだけで充分である。例へば原理に於ける如き。何故ならであることは最初にして原理だからである。併し原理は或るものは歸納により、或るものは感覺により、或るものは一定の習慣づけによつて、又他のものは他様にして到達される。」 An. Post. B. 19. 100 b3. 「なごり明かに我々は最初的前提を歸納によつて知らねばならない。けだし感覺も亦この様にして普遍的なものをいへる出すのである。」 cf. Ibid. 2. 90 a28. A. 31. 88 a3.

一三〇 An. Post. A. 31. 88 a5. (註一一参照) Ibid. A. 271 b3 ff. 「より先をかより知られてゐるといふには二通りある。本性上先なるものと我々にとつて先なるものとは同一ではないし、本性上より知られてゐるものと我々にとつてより知られてゐるものと同じではない。我々に對してより先でありより知られてゐるといふ事は感覺により近いものである。しかし端的に先であり知られてゐるものとは最も遠いものである。そして普遍的なものは最も遠く個別的なものは最も近い。そして之等は互に相對する。」

一三一 An. Pr. A. 30. 46 a22. Met. A. 1. 981 a3; b8. A. 8. 1074 b1. Eth. Nich. A. 1. 1094 a7, 18. Pol. p. 12. 1282 b14. A. 1. 1288 b10. H. 13. 1331 b37. Rhetic. B. 19. 1382 a26. cf. Met. A. 1. 981 b28. B. 2. 937 a5. An. Post. A. 1.

アリストテレスに於ける知性の構造(承前)

- 71 a4. Top. I. 9. 170 a30 f. II. 172 a28 f.
- 1111 An. Post. B. 19. 100 a8. Met. A. I. 981 b26 1/2. Eth. Nich. Z. 4. 1140 a1, 12. 22. 5. 1140 b2.
- 11111 Eth. Nich. A. I. 1094 a14. Phys. B. 2. 194 b1. Met. A. I. 1012 a12.
- 1111 Eth. Nich. Z. 5. 1140 b22. 11114 Eth. Nich. Z. 5. 1140 b20. 22 f. Met. A. I. 1012 a12.
- 1112 Ibid. 4. 1140 a10, 21. 22 f. Met. A. I. 1012 a12. 11114 Waller. Op. cit. 512. cf. 464 f.
- 1118 Mag. Mor. A. 19. 1150 a30.
- 1119 Met. A. 16. 1021 b20. 「その徳とは或る完成のうちにあり。何故ならば各事物の完全であり、凡ゆる實體の完全であるのは、その個々の形相の徳に關してその本性上の大きに何ら缺ける部分のない場合であるから。」
- 1120 Eth. Nich. Z. 4. 1140 21. 1121 Jager, Aristoteles. 241 ff. 1121 Meno. 98.
- 1123 のみならずアトモカの如き初期的作品に於て H. 7. 137 a12. 「思慮は^{メタ}知^ノである。」と云ふやうに思慮を特殊の意味に用ひる例を認められる。また Top. A. 2. 121 b33. 「^{メタ}知^ノは^{メタ}知^ノである。」と云ふやうに認めてはならぬ。」といふやうな言葉もみられる。
- 1124 思慮に關しては拙稿「アリストテレスに於ける靈魂諸部分の聯關」第八節參照。それは他様にありうるものの中、我々によつて左右しうる事情に關り、しかも目的ではなく、之を實現する手段に關する推論であつて、^{メタ}知^ノと云ふ概念に近き。cf. Eth. Nich. I. 5. 1112 a30, b11. Z. 2. 1130 a13. Mag. Mor. A. 35. 1156 b59. Rhet. A. 2. 1357 a4. 6. 1362 a18. B. 5. 1383 a7.
- 1125 Eth. Nich. Z. 10. 1142 b22, 27.
- 1126 Eth. Nich. Z. 11. 1143 a4. 「即ち明察の關するのは永遠的にして運動しない存在でもなければ生成するところのものなら何でもよいと言ふのもなく、ひとがそれについて困惑し思慮するであらうところのものである。それ故思慮と同じもの關が、明察は思慮ではなく。思慮は命令的である、即ち何をなすべし、何をなすべからざるかといふことがその目的である。」

が明察は單なる判別である。」cf. *Mag. Mor. A. 35. 1197 a11. Pol. I. 4. 1291 a28.*

一四七 *Eth. Nich. Z. B. 1144 a23.* 「人々の情利と呼んでゐるところの能力がある。それは與へられた目標に導くところの事柄をなして之等に到達せしめることを可能ならしめる様なものである。それ故目標がよくあれば、賞讃されるべきであるが、悪くあれば發知となる。」cf. *Ibid. 1144 b2. H. II. 1152 a11. Mag. Mor. A. 35. 1197 b17 ff. B. 6. 1264 a13 ff. Pol. E. 5. 1305 a12. Eth. Nich. 6. 7. 1158 a2.*

一四八 *Eth. Nich. Z. B. 1144 a27.* (前註参照) cf. *Eth. Eud. B. 3. 1221 a12.*

一四九 *De Memor. 2. 453 a14.* 「記憶力と云ふものは一種の推論である。」*Eth. Nich. Z. 2. 1139 a12. Z. 10. 1142 a31. P. 5. 1112 b22.* 註一四一参照。

一五〇 *Eth. Nich. Z. 12. 1144 a29.* 「しかしこの眼が(思慮といふ)把持性をうるためには既に我々が述べたし、また明かでもある如く、徳を缺いてゐてはならない。何故ならば實踐的なものに關する推論は目的とか最もよきことは斯々のものであるから……と言ふことを前提として持つ。しかるにこれは善き人にでなければ明かではない。けだし惡徳は人を倒錯して實踐的なものに關する前提を誤認させるからである。したがつて善き人たることなしに思慮ある人たることの不可能であることは明かである。」*Ibid. 1144 b30.*

一五一 *Eth. Nich. Z. 13. 1145 a4.* 「……また意思は思慮なくしてはありえないこと、また徳なくしてもありえないことが明かである。即ち一は目的を、一は目的への手段を實現せしめるものだからである。」但しこの目的定立は徳の職分であり、手段は思慮の仕事であることはこの章の敘述によつて明かである。また之等の引用文で單に徳と言つてゐるのは勿論倫理的徳に他ならない。尙次の註(引用文本文)参照。